

## いま、学校が求めている道徳科の研修内容は「基礎基本」だ

2019(H31).04 後藤 忠

昨年度(平成30年度)私は、「道徳科が始まったが道徳の授業のことがよく分からない。0から学びたいので1から教えてほしい」という学校からの依頼を優先してお受けした。その結果、研修回数は半日を単位にして延べ120回を超えた。この結果は70歳を過ぎた老人にとってはいささか厳しいものであった。

しかしながら、今多くの学校が道徳科の研修を求めている。その内容は道徳科の「基礎中の基礎、基本中の基本」である。その求めは非常に切実で、しかも強い。

教育委員会は既存の道徳研修会のあり方を見直し、改善しているところも出てきている。

また、多くの校長の熱意が教員を変えている。校長自ら受講の陣頭に立ち、教員と一緒に研修や演習に取り組み、議論を交わしている。その姿を間近に見て、本気にならない教員はいない。

今こそ、みんなが「0からの出発」の覚悟をもって道徳科に臨む時だと思う。

そうした最中の昨年6月に町田市立某小学校から夏季休業中の研修会講師の依頼を受けた。

しかし、夏休み中は(お盆時期を除いて)すでに予定が入っていたのでお断りしたが、「午前でも午後でもいいから頼みたい」と言われ、午後某小学校へ伺った。

研修会の後、先生たちがA6判の紙に記してくれた研修感想を読んで、「ああ、やっぱり来てよかった!」と思った。そのいくつかを紹介する。

～ ～ ～ ～ ～ ～

○ 今年度から教材研究の仕方や授業の組み立て方などを改めて勉強し直しています。それでもよく分からないこと、イメージできないことが多かったのですが、今日の研修で道徳科の授業に対するイメージがはっきりし、早く2学期に道徳がしたいなと思いました。

今日お話いただいた扇のイメージがすごく分かりやすく、道徳科は自分を見つめる時間、自分の心を感じる時間なのだと思います。また、中心発問、基本発問の組み立て方も具体的に教え

ていただいたので、教科書の教師用指導書を見ずに自分で考えていきたいと思います。今日、中心発問を考える中で、指導書に自分が影響されていると感じました。これからさらに深く考えていきたいと思います。

○ 一番驚いたのが中心発問の設定のところでした。今までは主人公の内面が大きく動くところだと思っていたのですが、違っていたことが分かり、大きな答えを得たような気持ちです。まずは教師用指導書を見ずに自分で考えてみるころから始めたいと思います。

○ プレゼンも見やすく、分かりやすく、「道徳とは何か」「道徳教育と道徳科の違いは何か」などがはっきりと理解できました。若い先生方もどんどん前のめりになって参加していく様子が見て取れました。これから教科としての道徳が本校に根付く素地を作ってください、ありがとうございました。あつと言う間の濃い二時間半でした。

○ 今まで私は、どうしても「行動」に表れる道徳性を求めていたので、今日は改めて道徳教育を授業として行う意義を考えさせられました。実際に、心になかなか響かない、届かない子供達に対して、表面的な道徳心を追ってしまうことの怖さを感じました。

○ 的を射たシャープな発問構成をしていくために、もっともっと深く、丁寧に教材研究をしていかなければいけないと強く感じました。今、2学期に行う小教研の指導案を書き始めていましたが、もう一度、一から見直して作り直したいと思いました。

○ 「教材提示に命を懸ける」の言葉が深く心に刺さりました。練習もせず、間も考えず範読していたことを子供達に申し訳なかったと反省しています。また、教材分析から中心発問や基本発問が浮かび上がってくることにびっくりしました。そして、教材分析の面白さも感じました。11月に研究授業を控えています、作成した指導案をもう一度、一から作り直します。

○ 「主体的であるとは、『誰か』と言われたら『自分だ』と思うこと」という先生の言葉にはガツンと胸を

打たれました。子供に早速伝えたいという思いと、何よりも私自身がその心で日々過ごしていきたいと強く思いました。

また、目に見えない「心」を映す鏡が教材の役割であること、道徳科授業の命である教材選びと教材分析を真摯に行っていくことで授業力が付いてくることなど、改めて実感しました。心を耕す道徳授業ができるようにもっともっと力を付けていきたいという思いでいっぱいになりました。

演習では、グループで発問構成を考え、話し合う時間がとても有意義でした。一人一人の先生方の考えを聞くのがとても興味深く、楽しかったです。

- 今まで、道徳についてこれ程深く考えたことがありませんでした。教材分析表をあんなに細かく作ったこともありませんでした。改めて、教材分析から発問を導き出すことの大切さと確かさを学習しました。先生の講義は具体的で、目から鱗が落ちる連続でした。今まで自分がいかに適当な授業をしていたか、恥ずかしくなりました。
- はしの上のおおかみ、「いつまでもクマのうしろ姿を見て、おおかみは…」、私は今までずっとこの場面を中心発問にしていました。教育実習中に何度もそう指導を受けてきたため、中心発問場面は子供達からおおかみの様々な気持ちや考えが一番たくさん出てくるところだと思っていたからです。でも違うのですね。おおかみの内面が「本時のねらい」のような状態で純粹に満ちている場面なんですね。発問構成は深いですね。
- 今まで自分が勉強してきた内容との違いを知ることができました。「中心発問で、子供はねらいとする道徳的価値のよさ(大切さ)を深く自覚し、実感する」と考えると、後藤先生に教えていただいたことに納得ができました。いただいた資料をも

っと読み込んで勉強したいと思いました。

- 「中心発問場面は授業者によって違ってよいというものではない。しかし、その中心発問を支え、光らせ(冴えさせ)、ねらいに迫らせるために必要な基本発問の設定は授業者の授業戦略によるものであり、そこには授業者の個性や人柄、授業への思いなどが表れてよいと思う。指導案検討では、みんなで大いに議論を交わすが、最後の決定は授業者本人にさせるべきだと思う」という先生の言葉が強く印象に残りました。

「指導書が授業をするのではない、授業者が授業をするのだ」という言葉にもガンとききました。

- 「本時のねらい」の言葉に登場人物を当てはめて考えると、抽象的だったねらいがはっきり具体的にイメージできるようになることに本当に驚きました。そして、本時のねらいの大切さを痛感しました。
- 道徳科は人間として大切なことがたくさん詰まっている教科なのだから、「眉間にしわを寄せて難しく考えなくていいんだよ」という先生の言葉に救われた教員は多いと思います。私もたくさん元気とパワーをいただきました。

本稿は、日々教員研修にご尽力されている指導講師の先生方への情報提供のつもりで掲載させていただいた。僭越をどうかお許しいただきたい。

各先生方の研修のご参考に供せられれば誠に幸甚に思う次第である。

今こそ、地道に道徳教育に取り組んできた者達が一丸となって学校現場の求めに応え、正しい道徳科の普及・啓発に努めるべき時だと思う。

今後の5年間を全力疾走すれば、必ず成果は出ると思う。